

障害の多様化に対応した 職業リハビリテーション支援ツールの開発（その2） ーワークサンプル幕張版（MWS）新規課題の開発ー

（調査研究報告書No. 145） サマリー

【キーワード】

ワークサンプル幕張版（MWS） 気分障害 発達障害 適応障害 高次脳機能障害
復職支援 自己理解 ストレス・疲労への対処

【活用のポイント】

本研究では、「ワークサンプル幕張版」について、難易度が高く、より実務に即したワークサンプルを開発して欲しいとの要望に応え、「給与計算」「文書校正」「社内郵便物仕分」の3つの新たなワークサンプルを開発した。

復職や再就職を目指す支援対象者（気分障害、適応障害、発達障害、高次脳機能障害などのある人）に活用した事例を紹介し、新規課題で強化及び追加されたMWSの機能、障害特性に応じた効果的な活用方法、実施上の留意事項を記載している。また、新規課題に関する一般参考値も掲載している。

2019年4月

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

1 執筆担当（執筆順）

八木 繁美（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
前原 和明（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
知名 青子（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
渋谷 友紀（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

2 研究期間

平成28年度～平成30年度

3 報告書の構成

序 章 本研究の背景と目的及び方法
第1章 MWS新規課題の開発
第2章 一般成人に対する新規課題の実施及び結果
第3章 障害者に対する新規課題の実施及び結果
第4章 新規課題の効果的な活用に向けて
（新規課題の機能、活用上のポイント及び留意事項）
第5章 今後の課題
資 料 新規課題の一般参考値

4 調査研究の背景と目的

障害者職業総合センター研究部門（障害者支援部門）では、平成11年度からの5年間において高次脳機能障害者や統合失調症者に対する評価・支援技法として、「職場適応促進のためのトータルパッケージ」（以下「トータルパッケージ」という。）の開発を進め、その後、支援の現場におけるトータルパッケージの汎用性を高めるための研究を行っている。

ワークサンプル幕張版（以下「MWS」という。）は、このトータルパッケージを構成するツールの一つであり、平成19年度より市販化され、職業リハビリテーション機関を中心に、労働・教育・福祉・医療など様々な機関で活用されている。開発から10年以上が経過したことから、MWSの活用実態と改訂に関するニーズを明らかにするため、平成24年度に基礎調査を行い、MWSを構成する各ワークサンプル（以下「既存課題」という。）の改訂や新たなワークサンプル（以下「新規課題」という。）の開発へのニーズを確認した。そこで、特別研究17（平成25年度から平成27年度）において、既存課題の改訂と新規課題の作業種目の選定及びプロトタイプの作成を行った。

本研究は特別研究17の次期の研究として、①成人後に発達障害と診断を受けた人や精神疾患等（気分障害など）により休職し職場復帰を目指している人に対し効果的な支援が提供できるよう、既存課題よりも難易度が高く、現在の雇用環境に即した新規課題の開発を行うこと、②新規課題の開発により強化及び追加されたMWSの機能を明らかにすること、③新規課題に関

する一般参考値を作成することの3点を目的とした。また、これらの目的に加え、障害特性に応じた効果的な活用方法及び実施上の留意事項について検討を行った。

5 調査研究の方法

(1) 専門部会の設置

専門部会として、国立吉備高原職業リハビリテーションセンターの指導員、地域障害者職業センターのカウンセラー及びMWSを活用している外部機関の支援者を委員とする専門部会を設置した。本研究においては、①研究協力機関に所属する職員に対する事前試行、②研究協力機関を利用する支援対象者への新規課題の実施及びその結果に基づく活用効果の検討を目的として運営した。

(2) 一般成人を対象とした事前試行

平成28年度は、一般参考値設定のためのデータ収集に向け、当機構及び研究協力機関に所属する職員を対象に新規3課題（下記6（1）参照）の事前試行を行い、実施手続きと採点手続きの見直しを行った。

(3) 障害者に対するデータ収集

平成28年度から平成30年度において、新規課題の活用の効果、障害特性に応じた効果的な活用方法や実施上の留意事項などの把握を狙いとし、研究協力機関を利用する支援対象者へのデータ収集を行った。

(4) 一般参考値整備のための一般成人データの収集

平成29年7月から平成30年10月において、一般参考値作成のためのデータ収集を行った。平成29年度については、既存課題と同様に人材派遣会社から一定の要件を満たす労働者をデータ提供協力者として確保した。平成30年度については、被験者紹介サービスに依頼し、20代から50代の男性及び20代女性のデータ提供協力者を確保した。

6 調査研究の内容

(1) MWS新規課題の開発

新規課題の開発に当たっては、表1の方針に基づき作業を選定し、OA作業として「給与計算」、事務作業として「文書校正」、実務作業として「社内郵便物仕分」を開発した。新規課題の構成及び各ワークサンプルの内容を表2に示す。

なお、新規課題の特徴の一つとして、図表などの資料や手引きを参照・確認しながら遂行する作業を想定し、サブブック（作業に必要な図表や実施手続きなどを示したもの）の参照を前提としている。サブブックの活用により、「文書に記載されたルールを理解する力」「理解したルールを的確に運用する力」を把握することも狙いとしている。

表1 作業種目選定の考え方

- ① 現在の労働市場に存在する作業であること
- ② MWSを構成する3つの作業領域(OA作業、事務作業、実務作業)について1種類ずつ開発すること
- ③ MWSのコンセプトに沿った作り込みが可能であること
- ④ 成人後に発達障害と診断された人や精神疾患等(気分障害など)により休職し、職場復帰を目指している人に対し効果的な支援が提供できるよう、既存課題よりも高い難易度を設定すること
- ⑤ 既存課題の開発時に主な対象として想定をしていた高次脳機能障害者や統合失調症者、知的障害者への適用可能性を視野に入れること
- ⑥ 一般参考値の提供が可能であること
- ⑦ コスト面(製造コスト、支援場面で活用する際の負担など)が多大でないこと

表2 新規課題の構成及び各ワークサンプルの内容

領域	名 称	内 容
OA 作業	給与計算	<内容> 画面に表示された社員1名分のデータをもとに、給与計算に必要な各項目の値を算出し、指定されたセルに数値を入力する。算出方法を記載したサブブックと別添資料(保険料額表、源泉徴収税額表)を参照しながら作業を行う。 <構成> 1試行:社員1名分の給与計算、1ブロック:6試行、レベル:4段階
事務 作業	文書校正	<内容> 事務文書、報告書等の印刷原稿を用いて校正作業を行う。原稿と校正刷の文字等を引き合わせ、サブブックや報告書作成規定にしたがい、校正記号を用いて誤りを修正する。 <構成> 1試行:要修正箇所1箇所、1ブロック:2試行~16試行、レベル:7段階
実務 作業	社内郵便物 仕分	<内容> 仮想の会社へ届いた葉書や封書などの郵便物を、仕分のルールにしたがって、組織図・社員名簿・あいうえお索引を参照しながら、適切なボックスやフォルダーに仕分ける。 <構成> 1試行:郵便物1通、1ブロック:20試行、レベル:5段階

(2) 一般成人に対する新規課題の実施及び結果

各ワークサンプルの一般参考値作成及び特徴把握のため、新規3課題を一般成人に対して実施した。期間は平成29年7月~平成30年10月、研究協力者数は163名であった(男性65名、女性98名)。結果を表3に示す。

(3) 障害者に対するデータ収集及び結果

新規課題を主に評価として活用した事例と作業遂行力の向上などのトレーニングとして活用した事例を中心に、障害別(気分障害、適応障害、発達障害、高次脳機能障害)に記載し、事例ごとに実施経過を整理し、支援上のポイントとなる点や活用上の留意事項について検討をした。また、従来の支援対象者への適用を考慮し開発した「社内郵便物仕分」を、統合失調症者及び知的障害者に対し実施した事例について1例ずつ記載した。

表3 一般成人に対する新規課題の実施結果

ア 各ワークサンプルの正答数と各種変数の関係(※)

- ・「給与計算」の正答数は、各変数との関係がほとんど考えられない
- ・「文書校正」・「社内郵便物仕分」の正答数は、一部の変数との関係はあるが、強いものではない
- ・「給与計算」に関しては、簡易版・訓練版で、年齢と作業時間の間に中程度の正の相関が認められた

イ 各ワークサンプルのエラーの生起状況

- ・各種エラーの生起状況は、各ワークサンプルのレベル構成に順当に依存する

ウ 各ワークサンプルの疲労度及び疲労サイン

- ・疲労度
 - ・簡易版は、「社内郵便物仕分」が「給与計算」・「文書校正」に対し有意に低い
 - ・訓練版は、「社内郵便物仕分」が「文書校正」に対し有意に低い
- ・疲労サイン
 - ・簡易版・訓練版のいずれのワークサンプルにおいても、「目の疲れ」の生起数が多い
 - ・訓練版では、簡易版に比べ、疲労サインの生起数が多くなる
 - ・一部の疲労サインで、「社内郵便物仕分」が、「給与計算」・「文書校正」に比べ有意に少ない
 - ・「全身のだるさ」のみ、訓練版で、「給与計算」が「文書校正」に対し、有意に多い

エ 各ワークサンプルの簡易版の実施順序

- ・実施順序によって、正答数に有意な差は認められない
- ・実施順序によって、作業時間に影響がある可能性がある

※用いた変数は、性別、年齢、作業時間

(4) 新規課題の効果的な活用に向けて

障害者及び一般成人に対する実施結果に基づき、新規課題の活用により強化及び追加されたMWSの機能、障害特性に応じた効果的な活用方法及び実施上の留意事項について検討を行った。

ア 新規課題の機能**(ア) 新規課題（簡易版）の機能**

既存課題の簡易版には、体験としての機能と評価としての機能がある。

新規課題の簡易版については、既存課題では把握されなかったエラー傾向やストレス・疲労の現れ方、職業上の強みとなる特性、既存課題を活用し習得した補完方法の有効性などの把握が可能となり、評価としての機能が強化された。また、簡易版を通じて各ワークサンプルの難易度を体感し、結果のフィードバックによって自身の目標が明確になることで、対象者（及び支援者）が訓練版を用いたトレーニングに当たっての適切なワークサンプルを選択することが可能になることが示唆された。

(イ) 新規課題（訓練版）の機能

既存課題の訓練版には、①作業能力の向上や補完方法の活用に向けた評価と支援、②作業に関するセルフマネジメントスキル確立のための評価と支援、③ストレス・疲労に関するセルフマネジメントスキル確立のための評価と支援などがある。新規課題については、これらの機能の強化に加え、④訓練に対するモチベーションの維持、⑤自己の特性への気づき及び事業所との調整事項の明確化という機能が追加された。

①については、特に「サブブックを丁寧に読む」「自分の行った作業を適切な方法で確認する」

という行動が形成されることが明らかとなった。

②については、サブブックに基づく手順書の作成など自身に有効な手がかりを作成する機会や、作業遂行の正確性を高めるために、自己教示や自己記録、自己監視、自己評価などの手続きを導入する機会が増えた。

③については、職場において疲労やストレスが生じる状況を現実に近い形で再現することができ、実務に近い疲労やストレスの現れ方をモニタリングし、休憩の取り方やペース配分など、疲労やストレスへの対処方法を検討する機会が増えた。

④については、復職支援の受講者を中心に、「作業としての手応えがある」「達成感がある」「自信につながる」などモチベーションにつながる感想を得た。

⑤については、新規課題の活用により、環境との相互作用によっては障害となる可能性のある認知・行動特性について、対象者に気づきをもたらすことが示唆された。また、新規課題の活用を通じて得た気づきを、対象者自身が作成した復職支援プログラムの報告書やナビゲーションブックに反映した事例からは、新規課題の活用が当事者の認知・行動特性についての気づきを深める体験となり、支援者との相談を経て、復職後の自身の働き方に対する心構えや事業所との調整事項の明確化につながることを示唆された。

イ 活用のポイント及び留意事項

本節では、新規課題を効果的に活用する上でのポイント及び留意事項として、(ア)各ワークサンプルの活用が想定される対象者、(イ)新規課題を活用するタイミング、(ウ)モチベーションの維持、(エ)過集中になる対象者への対応、(オ)結果のフィードバック、(カ)トータルパッケージの他のツールとの併用、(キ)シングルケース研究法の応用、(ク)「社内郵便物仕分」における郵便物の整理、(ケ)一般参考値の取扱いについて検討をした。

(ア) 想定される対象者

① 新規3課題共通

障害者に対するデータ収集の結果からは、複数箇所に注意を払いながら、一定時間（少なくとも30分間以上）注意を持続できることが対象者の要件と考えられた。

② 給与計算

サブブックの内容及び各種表（保険料額表、源泉徴収税額表など）を理解できる（または理解できる見込みがある）ことが対象者の要件となる。高次脳機能障害者については、サブブックの理解に困難さが認められたものの、過去に類似した職業経験がある事例の場合、訓練版の活用により、補完方法の習得に向けたトレーニングが可能となった。

③ 文書校正

サブブック及び報告書作成規定の内容を理解できることが対象者の要件となる。訓練版のレベル1からレベル5は文字の校正のみであり、「原稿と校正刷の文字を読むこと」ができ、サブブックを参照し、「校正手続きを適切に理解すること」ができれば実施可能である。

④ 社内郵便物仕分

郵便物の宛名の判読ができること、サブブック内の仕分のルール・組織図・社員名簿・あい

うえお索引を理解できることが対象者の要件となる。障害や職業経験を問わず、気分障害者や発達障害者、統合失調症者、高次脳機能障害者、知的障害者など幅広い対象者に対し活用できることが確認された。

(イ) 新規課題を活用するタイミング

既存課題で安定した作業遂行が可能であったにもかかわらず、新規課題の簡易版で正答率が低位であった事例や、正確性を高めるためのトレーニングに相当の時間を要した事例からは、様々な作業に共通する基本的な要素からなる既存課題を活用し、アセスメントやトレーニングを行った上で新規課題を活用する方が、より効果的であると考えられた。特に、既存課題の中でも難易度が高いワークサンプルにおいて安定した作業遂行が可能だと判断された場合に、新規課題を実施する方が、対象者にかかる負荷は低いと考えられる。

(ウ) モチベーションの維持

障害者に対する実施結果から、新規課題については、訓練版を活用したモチベーションの維持につながるという機能が明らかとなったものの、ワークサンプルの難易度を上げるという方法のみで、訓練へのモチベーションを維持することには限界がある。そのため、既存課題・新規課題を問わず、トータルパッケージの狙いやMWSの実施手続きについて、本人と支援者間で共有しておくことが重要となる。

(エ) 過集中になる対象者への対応

新規課題の中でも「給与計算」については、対象者（特に発達障害者）が過集中になりやすいとの報告が挙げられた。過集中につながる言動が確認された場合は、職務への取り組み姿勢との類似点を確認し、スケジュール管理やストレス・疲労への対処という視点から自身の働き方の特徴について考える機会とすることもできる。

(オ) 結果のフィードバック

障害者及び一般成人への実施から、対象者によっては、本人が想定をしていない結果となった場合に強いストレス反応が喚起されることが確認された。一方、簡易版の正答率が低位であっても、その結果を受け止め、訓練版への意欲につなげた事例も報告された。これらの事例からは、新規課題を活用する目的を事前に共有し、新規課題を実施後はグループワークや相談につなげるにより、新規課題を通じ体感したことを、対象者自身が振り返ることができる機会を設けることが大切だと考えられた。

(カ) トータルパッケージの他のツールとの併用

新規課題においても、M-メモリーノートに実施結果や補完方法を整理することで効果的な対処方法の検討につながった事例や、WCST（Wisconsin Card Sorting Test）の実施により潜在的な支援のニーズの把握につながった事例が報告された。

(キ) シングルケース研究法の応用

MWSは、個々の対象者にとって有効な指導・支援の方法を明らかにすることを目的に、作業結果の正答率や作業時間などのデータに基づいて介入方法を検討し、その効果をデータによって評価し、介入方法の改善につなげるという手続き（シングルケース研究法）により実施

することを推奨している。トータルパッケージの過去の研究では、このシングルケース研究法を応用した実施手続きについて、「人的・時間的コストがかかる」「実施方法の習熟が難しい」などの意見が挙げられた。しかし、新規課題の活用事例からは、対象者と支援者が協同でデータを取り検討できる、事業所に対しデータに基づき学習のプロセスを提示できるという利点が示された。人的・時間的コストを低減する方略としては、復職支援の受講者など作業遂行力が高い対象者の場合、トータルパッケージの目的について共有化を図った上で、対象者自身がシングルケース研究法を応用したMWSの実実施手続きに沿って、結果をモニタリングしながら進めていくという方法を提案することもある。

(ク) 「社内郵便物仕分」における郵便物の整理（グループでできる作業の開発への対応）

「社内郵便物仕分」については、当初より、訓練版を実施した後の郵便物の整理に時間がかかることが指摘されている。この点については、「社内郵便物仕分」を活用し、安定した作業遂行が可能となった利用者や同ワークサンプルの活用予定がない利用者に対し、郵便物の整理を役割として指示する、あるいは利用者が相互に依頼や調整をする機会として活用する方法が考えられる。このような活用の工夫により、平成24年度の基礎調査で確認されたコミュニケーションを要する作業や複数で分担する作業の開発への要望に、部分的に応えることができると考えられる。

(ケ) 一般参考値の取り扱い

本研究において作成したパーセンタイル順位表は、派遣労働者等を対象としたデータ収集の結果から算出されたものであり、一般成人の代表値ではなく、また、特定の職務経験に基づく集団を対象としたデータでもない。したがって、対象者にパーセンタイル順位表を活用してフィードバックをする際には、新規課題に類似する職務への復職や就職に当たっての目安となる基準を示すものではなく、あくまで一般参考値であることに留意する必要がある。

7 今後の課題

障害者及び一般成人に対する実施結果から、新規課題の開発により、MWSの機能が充実・強化されたことが確認された。今後は、広域・地域障害者職業センターをはじめとする様々な職業リハビリテーション機関において、トータルパッケージを構成するツールの一つとして新規課題を含めたMWSが活用され、就職・復職後の職場適応への有効性を示すデータを蓄積していくことが重要である。

また、新規課題については、難易度の高いワークサンプルとして開発をしたことにより、支援者が実施手続きを理解する上での心理的なハードルの高さも指摘されている。そのため、効果的な研修方法の検討が課題として挙げられる。